



# 中山船番所資料館 開館!!

「川の関所」を実物大で再現

去る3月22日(土)に中川船番所資料館(大島9-1-15)がオープンしました。これにあわせて東大島文化センターにおいて、22日と翌23日の2日間にわたり開館記念イベントが行われました。



都営新宿線東大島駅ホームからも見える茶色い建物です。

22日(土)には「落語&釣リトーク」と題して、第一部では、江東区在住の三遊亭歌司師匠に釣りにまつわる落語「野ざらし」を披露していただきました。第二部では、「江戸和竿と釣りの魅力」と題して、歌司師匠が進行役となり、松本三郎氏(竿師6代目東作)<sup>さく</sup>・中根喜三郎氏(竿師4代目竿忠)<sup>つねちか</sup>・井上博司氏(ヒューマンアカデミーフイッシングカレッジ学科長)・渡辺紀行氏(財団法人日本釣振興会本部評議員)・樋口正恭氏(東京釣具博物館理事)・室橋昭江東区長の6人の方をパネリストとして、和竿の魅力や江東区と釣りに関する話に



1階エントランスホールでのテープカット

全国的にも珍しい水運の専門資料館として大いに活用ください。

花を咲かせました。資料館の2階には、東京釣具博物館から寄贈を受けた江戸和竿が展示されており、これにあわせて催し物でした。

23日(日)には、開館記念講演会として、江戸時代における関東周辺の河川流通史研究の第一人者である、千葉経済大学教授の川名登先生を招いて「中川番所とその背景」をテーマに、

## 中川船番所資料館開館!!

第21回時雨忌記念講演会講演録  
芭蕉の転機

## 工匠壱番館展示替え

さまざまな工芸材料による作品

## 横綱力士碑を指定!!

平成14年度指定・登録文化財紹介

## 平成14年度民俗資料寄贈者リスト

## 工匠館ミニ展示

職人の仕事場模型

# 下町文化

NO. 221  
2003.4.28

発行  
江東区教育委員会  
生涯学習部生涯学習課  
〒135-8383  
江東区東陽4-11-28  
TEL(03)3647-9819  
http://www.city.koto.tokyo.jp/~bunkazai

中川船番所は、江戸幕府が小名木川の中川口に設けた川の関所です。寛文元年（1661）に小名木川の隅田川口にあった江戸幕府の「深川口人改之御番所」が移転してきたものです。

その跡地については、『江戸名所図会』や各種の江戸図から、江東区大島9-1が有力な候補地として推定されていました。

平成6年度、同地において土壌処理作業が行われた際、多数の瓦片が出土したため、土地所有者の日本化学工業（株）が主体となって、江東区中川船番所遺跡発掘調査団が組織され、番所の礎石の一部や柱材・硯や下駄などを発掘し、番所跡地であることが確定されました。

中川番所の役人には、寄合の旗本（なかから3名から5名が任命されて「中川番」と呼ばれ、5日交代で勤めていました。普段は旗本の家臣が派遣されていました。

番所では、小名木川のすぐそばに番小屋が建てられ、川を通行する船を見張っていました。主に夜間の通船、女性の通行、武器・武具の取り締まり、船で運ばれる荷物などを検査しました。

中川番所が置かれた場所は、中川と番所の手前を流れる小名木川、そして行徳（千葉県市川市）へとつながる船

堀川が交差する地で、利根川や江戸川などの河川を通じて江戸と関東内陸を結ぶ重要な場所でした。

「通ります通れ葛西のあむ石」と川柳に詠まれたように、通船の増加によつてその手続きは形式化していったようですが、幕府の流通統制政策に基づき、江戸に入る物資の改めを厳しく取り行っていました。

それでは、館内をご案内しましょう。チケットを買ったら、エレベーターで3階に上がりますよ。

### 3F 常設・企画展示室

#### 1 中川番所

エレベーターを出ると、そこは江戸時



番所役人も子どもにはタジタジです。

代です。時間は何時ごろでしょうか。8分間で鶏が鳴く朝から、行灯に灯がともる夜まで時が進みます。さあ、足元の小名木川から正面の石段を上がりますよ。中川番所の前に出ます。

これこれ、そなたたち。ここは中川番所であるが、何用であるか？ 座敷に座っている番頭から問い掛けられました。

（『下町文化』の取材なんですけど...）  
ほ、ほ。見字に参られたとや。  
良いことじゃー！  
お待さんに褒められてしまいました。  
セリフは3パターンありますので、お楽しみに。

この常設展示室では、瓦屋根の中川番所と検査を受ける酒樽を積んだ和船の再現ジオラマを中心に、出土遺物や番所に関する資料を展示しています。コーナーの内容は次のとおりです。

- 形づくられる江東
- 中川番所の成立
- 中川番所の役割
- 中川番所の廃止

壁には、帆掛け舟が遠くに見え、葦や松林に囲まれたのどかな農村風景が描かれていて印象的です。

#### 2 江戸をめぐる水運

さあ、常設企画展示室に入りましょう。まずは、「江戸をめぐる水運」コー

ナーがあります。

河岸とさまざまな物資

江戸内の物流と行き交う船

川浚い 小名木川の維持管理

江戸時代の河川水運について、河岸に関する資料や江戸時代の和船の模型、海辺大工町（現江東区清澄・白河）や小名木川の川さらいに関する各種の資料の展示・紹介をしています。



3階常設・企画展示室「江戸をめぐる水運」コーナー

#### 展望室

さて、勉強のし過ぎで頭が少し疲れました。展望室で休みましょう。この部屋には、ガラス張りの窓が設けられており、江戸時代の想像眺望図を眺めながら、旧中川と小名木川、そして江戸川区の大島・小松川公園と旧小松川



3階展望室 旧中川がみえています。

開門を展望することができま。開館日は快晴だったので、非常にいい眺めで、大変好評でした。

### 3 江戸から東京へ

さあ、展示室に戻りましょう。このコーナーでは、蒸気船の登場などによる水運の近代化を、通運丸や小名木川の古写真を中心に紹介しています。また、小名木川沿いの文化財・史跡を案内している「小名木川今昔物語」を見て、史跡散歩の予習をしておきましょう。

2と3のコーナーは、水運や江東区の歴史に関する資料を展示するコーナーで、特別展や企画展を行う時は展示替えとなります。

常設展示室に戻り、エレベーター脇の階段で、2階に降りましょう。

## 2F 釣具展示室

2階は東京釣具博物館より寄贈を受けた江戸和竿を中心とする釣具関係資料を展示しています。コーナー名は次のとおりです。

江戸和竿の歴史

さまざまな江戸和竿

江戸和竿の材料「竹」

江戸和竿をつくる竿師

江戸和竿のできるまで

企画展示

学習展示

企画展示では、現在春夏のものを展示しています。秋には秋冬用の展示になりますので期待してください。

再び、エレベーター脇の階段を下りて、1階に戻りましょう。



2階展示室 左に見えるのが和竿の材料・竹

## 1F

1階には、区内の歴史や水運に関する資料が閲覧できる資料閲覧学習室があります。展示を見て疑問に思ったことや興味を持ったことなどを調べてみましょう。

受付では、常設展示図録の他に錦絵『名所江戸百景』の「深川万年橋」「中川口」をデザインしたハンカチが売っています。なかなかきれいに仕上がっていますので、是非ご購入下さい。

中川船番所資料館の利用案内・交通案内は次のとおりです。

### 【利用案内】

開館時間 午前9時から午後5時

観覧時間 午前9時30分から午後5時まで（但し、入館は午後4時30分まで）

休館日 月曜日（祝日や振替休日のときは翌日）、12月28日から1月4日まで。但し、資料整理等のため臨時に休館することがあります。

### 観覧料

一般・高校生以上

200円（150円）

小・中学生 50円（30円）

カッコ内は団体（20人以上）料金。障害者手帳等を交付されている方

及び介護者1名 半額

### 【交通案内】

地下鉄（都営新宿線）

「東大島駅」下車徒歩5分

バス（都営バス）

・ 亀24甲（葛西橋）亀戸駅

・ 門21（東大島駅）門前仲町

・ 錦28甲（東大島駅）錦糸町駅

・ 亀24乙（東大島駅）浅草寿町

・ 「第五大島小」下車徒歩2分

・ 錦28乙（東大島駅）平井駅

・ AL01（東大島駅）東大島駅

「東大島駅前」下車徒歩5分

### 【問い合わせ】

中川船番所資料館

江東区大島9 1 15

☎03 3636 9091



案内図

## 第21回時雨忌記念講演会

# 芭蕉の転機

「炎環」主宰 石寒太



今月は、俳句の実作者の立場から「芭蕉」が「芭蕉」らしくなった転機についてお話ししてみたいと思います。

### 1、芭蕉の虚像と実像

「芭蕉」という俳号は39歳から用いました。現在の俳人は、あまり俳号を好みませんが、昔はほとんどの人が俳号を使っていました。本名と俳号があると、自分を切り替えるのに役立ち、また二つの自分が持てるので、俳号を持つことは、悪い事ではないと思います。

近代、現代の俳人で言いますと、高浜虚子は、清という本名をもじって、「虚子」と俳号を付けました。また、

山口誓子は、本名を「新比古」(ちかひこ)といい、俳号を「誓子」(ちかひこ)ともじって付け「ホトトギス」に投句していました。ある日、師の虚子に会った時に「君が誓子(せいし)君か」と言われ、それ以来「せいし」と発音するようになりました。藤田湘子は、湘南ボーイなので「湘子」と付けました。私の俳号は「石寒太」と言っています。

始めは本名で「寒雷」に投句していましたが、ある日師の楸邨から「君は明日から石寒太だ」と言われ、それからそれが俳号になりました。

芭蕉は、三重県の伊賀上野で生まれ幼名を「金作」と言いました。長じて通称は「忠右衛門」「甚七郎」、名乗りを「宗房」(むねふさ)、俳号は初め「桃青」(とうせい)を使います。深川に移り住んだ時「風羅坊」とも言っていました。新築祝いに弟子の季下(りか)が芭蕉の一株を贈ったところ、庭で大きく育ちました。芭蕉の大きな葉は、野分(台風)が来ると破れてばらばらになるのが、風流でよいと芭蕉は大変気に入ったので「芭蕉」を庵の名にし

ました。延宝9年・改元して天和元年(1681)芭蕉38歳のことです。俳号として初めて見えるのは、『武蔵曲』39歳の時です。

また芭蕉は、芭蕉翁や、俳聖芭蕉と呼ばれ、大変に歳をとったおじいさんというイメージが定着しています。

「おくのほそ道」300年のとき、多くの芭蕉像が作られました。背を丸め、杖をついて歳をとった芭蕉像になっています。しかし、芭蕉が芭蕉らしい句を作ったのは41歳のときからで、芭蕉が亡くなったのは51歳、ちょうど10年間で芭蕉らしい俳句を確立したのです。

### 2、生誕から芭蕉庵まで

芭蕉は伊賀上野赤坂の農人町で生まれました。柘植説もありますが、現在は赤坂が主流です。父は松尾与左衛門といい、あまり身分の高い人ではありませんでした。

芭蕉は次男ですので、伊賀上野の藤堂新七郎家に台所役人として出仕しました。藤堂家の若殿様は藤堂良忠といって、芭蕉と二歳違いの、蟬吟という俳号を持つ俳諧を嗜む人でした。その蟬吟との出会いが芭蕉が俳句をつくるきっかけとなりました。しかし蟬吟は25歳の若さで、突然に亡くなってしまいました。芭蕉は大変なショックを受けました。が、やがて俳諧で身をたてよ

うと、故郷を捨て江戸に下ります。

芭蕉が始めの頃作っていたのは、松永貞徳の貞門の俳諧でしたが、西山宗因を祖とする談林派が盛んになると、談林調の俳句を作りました。つまり、突然芭蕉らしい俳句を作ったのではなく、芭蕉も当時流行の俳句を作っていたのです。そのころの芭蕉の句を紹介すると、

あら何ともなやきのふは過てふくと汗  
という句があります。昨夜、河豚汁を恐る恐る食べたが、何でもなかったほっとしたよ。というような意味で、言葉遊びの俳句です。

また、天和期『虚栗』の時代には、漢詩文調の、歯切れはいいが、難解な言葉を駆使した句を多く作ってしまいました。しかし、深川の芭蕉庵に移った頃、芭蕉は今までの俳句に飽き足らなさを感じていました。ちょうどその頃、芭蕉の身边に色々なことが起こります。まず、伊賀上野の生母が亡くなります。また、江戸に大火が起こり、芭蕉庵も類焼してしまいます。そして、飢饉があつたりしました。そのころ芭蕉は書簡に、「無常迅速」と書いています。一生はあつという間に過ぎるということ、そして人生は無常だということなのです。

貞享元年(1684)芭蕉41歳の時、旅に出ようと決意します。旅に出て自

然にふれ、山や川、出会った人たちに直（じか）に触れて、旅と自分の俳句を一つにしようと試みたのです。その初めての試みが『野ざらし紀行』の旅なのです。

### 3、旅の始まり『野ざらし紀行』

第1句目の俳句は、

野ざらしを心に風のしむ身かな

です。「野ざらし」はしゅれこうべ・髑髏のことです。旅に出ると、行き倒れ野ざらしになるかもしれない。秋風はことさら身に沁むことだ、でもそんなことは良い、旅の第一歩を進めようと、そんな決意の一句です。

2句目の、

秋十年却つて江戸を指す故郷

の句は、江戸に出て十年がたった。伊賀上野が本当の故郷だが、母も亡くなり、今となってはむしろ江戸の方が故郷のようになじんでしまった、という意味の句です。

『野ざらし紀行』の旅は、東海道を上り、伊勢へ、そして故郷の伊賀上野で越年し、大和、京都を巡遊し、木曾路を経て江戸に帰る9ヶ月の、旅と自分を一つにする、初めての旅です。次の旅は、『鹿島詣』といって、芭蕉の禅の師、仏頂を訪ね月見をする旅です。そして『笈の小文』『更科紀行』があり、元禄2年『おくのほそ道』の旅になる

わけです。こうして、次々に旅をして自分を磨いていく訳ですが、そのきっかけになったのが、『野ざらし紀行』の旅なのです。

芭蕉の紀行文の書き方には、文章があり句があり、それをくり返すというパターンがあります。そのなかで、『おくのほそ道』は句文の融合がすばらしく、紀行文の代表ともなっています。芭蕉の句は一句単独で詠まれたものではありません。たとえば、

さみだれをあつめて早し最上川

は歌仙です。座の文芸で、5・7・5と7・7。5・7・5と7・7・5と鎖状につながって36句まで続き、終わりの句、拳句で止まります。「拳句のはてはここから来ていて、これで終わり」という意味です。1番目の句は「発句」2番目の句は、その脇につけるので「脇句」3番目の句は「第三」と言います。4番目の句から35句目は、平均と言っていました。連句は2花3月の約束ごとがあり、36句のなかに2箇所「花の座」、3箇所「月の座」をもっています。さらに、恋は場所が決まっています。どこかに恋の句をいれ、パランスよく、36歌仙をつくりまします。

歌仙は、宗匠が中心になって、発句から始まり、拳句に終わる36句を、共同で作ります。1句、1句では評価さ

れず、最後になってみんなで作った歌仙が、よかつたかどうかが評価されます。「さみだれ」の句は、山形県の大石田で巻いた歌仙です。始めは、

さみだれを集めて涼し最上川

という、高野家への挨拶句でした。それが『おくのほそ道』本文では、最上川の水嵩の多い急流を見て、「早し」と変えます。つまり1句では独立していません。

### 4、晩年の十年間と死

芭蕉を巡る人々のなかには、職業、年齢、性別が様々な、蕉風山脈と呼ぶにふさわしい優れた人々がいました。たとえば、スポンサーの鯉屋杉風は、

魚問屋。許六は絵描きで芭蕉の絵の先生。染物問屋。女性の園女等々です。

芭蕉は弟子の良いところを吸収して句を作りました。そして、伊勢、美濃、伊賀などで、蕉門が広がっていききました。俳諧の面白いところは、座のなかで、職業、年齢、男女の性別なく、句を出し合って戦う事です。芭蕉は座の中で、切磋琢磨しながら句を作り、芭蕉という伴人が、どんどん大きくなっていった。

芭蕉らしい句を作ったのは、晩年の10年、41歳から51歳までの、旅に出て自然と自分の句を一つにしようと試みてからです。座とは場所であり仲間です。これを別の言葉で言うと宴（うた）

げ）とも言います。片方で、孤独の中で句を磨き、宴の中で皆で鑑賞する。「文台引きおるせば反故」と芭蕉は言っています。作るときは一生懸命作り、出来てしまったら、作品は自分の手から離れ評価は他人にまかせ、ひとり歩きする、紙屑のようなものに等しい、と言うことです。芭蕉は真にこれができた人だと思います。

今日これから私は、琵琶湖に行きまします。奇しくも、芭蕉の墓は生前の遺言通り近江の「義仲寺」に納められました。芭蕉は旅の途中、大坂の御堂筋で倒れました。辞世の句は、

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

です。旅の途中、病に倒れても、まだもがき旅を夢中にさ迷っているのです。

芭蕉の旅のきつかけとなったのが、41歳のときの『野ざらし紀行』です。深川の芭蕉庵に入ってから、旅と俳句を一つにするという、新しい考えが始まったことです。これは、非常に大事なことです。これが転機でした。

今日は、深川の芭蕉記念館で、ほんとうに「芭蕉」が「芭蕉」らしい俳句を作ったのはいつか、そういう話をしたくて、そのところを中心にお話しました次第です。ありがとございました。  
\*この記録は、昨年10月13日に行なわれた、講演会の内容を要約したものです。

## 工匠番館常設展示替え

# さまざまな工芸材料による作品

区内の職人さんが製作した伝統工芸品を展示している工匠番館（森下文化センター2階、森下3-12-17、第1・3月曜日休館）では、毎年度常設展示替え（一部）を行っています。

今回は、「さまざまな工芸材料による作品」として、地蔵、江戸切子、櫛や帯留め、三味線駒、釣竿、べっ甲の作品を展示します。

工芸品は、実にさまざまな材料により、生み出されています。そこで、今回の展示では、工芸材料に注目し、どのような材料から、どのような作品が生み出されたのかについてご覧いただきたいと思います。

ここで、展示品を製作した職人（無形文化財工芸技術保持者）さんたちをご紹介します。

### 石工

立てかけて置かれていた石は、ノミにより命を吹き込まれていく石から仏像などを彫り出していくのは、新川昇さんです。

昭和6年に淡路島で6代続いた石工の家に生まれた新川さんは、父親のもとで技術を習得しました。昭和30年新川家を継いで清澄3丁目に移り、仕事を続けています。石仏などの彫刻を得意とし、区内では、仙気稲荷社前の神使石像、円隆院の水子地蔵などを手が

けています。昭和59年保持者認定。

### ガラス工（江戸切子）

クリスタルガラスは、カッティングをほどかせば光の反射が美しく、

屈折率が高く非常に透明感のあるクリスタルガラスに巧みに刻みをいれ、切子をつくり出すのは、須田富雄さんです。

須田さんは、大正13年に向島（墨田区）で生まれ、昭和11年に堀口市雄さんに弟子入りして技術を習得しました。現在、自宅の工房「秀石」で製作を続け、後進の指導にもあたっています。

平成3年保持者認定。

### 金工（鍛金）

材料を熱し、金づらでたたいたのばし、ノミで細工をほどこし、魅惑の装飾品が完成する

貴金属である金やプラチナなどから装飾品をつくり出すのは、佐生明義さんです。

昭和17年に向柳原（台東区）で生まれ、昭和36年から父親のもとで技術を習得しました。その後、八丁堀の杉本金工などで技術を磨き、高橋商店街に「ジュエリーリフォームショップ サシヨウ」を開き、今日にいたっています。

平成4年保持者認定。

### 象牙細工（三味線駒）

象の牙は、細かな彫刻に向き、適度な温度と湿度があれば美しさを保つ

貴重な工芸材料となった象牙から三味線の駒をつくり出すのは、前田賢次さんです。

前田さんは、大正15年に本所緑町（墨田区）で生まれ、小学生のころから父親の手伝いをして技術を習い覚えしました。昭和44年ごろから本格的に三味線駒を手がけ、長唄・清元・浪曲・小唄などの用途に応じた駒をつくらせています。昭和59年保持者認定。

### 竹工（釣竿）

竹は火を入れて曲がり直され、ウルシや蒔絵により生活道具から工芸品に昇華する身近な植物である竹から釣竿をつくり出したのは、松枝良雄さんです。

大正6年に深川安宅町（現、新大橋）で生まれた松枝さんは、父親について技術を習得しました。江戸時代、幕府の御家人であった祖父が釣竿をつくりはじめ、明治に入って本格的に開業し、以来3代にわたってつくってきました。戦後、大島2丁目に移り、「竿良」と号しました。昭和56年保持者認定。平成9年没。

### べっ甲細工

海亀タイマイの甲らであるべっ甲、湿気・熱を加えて張り合わせ、細工し、磨きあげると光沢を放つ

今や貴重な工芸材料であるべっ甲から装身具や置物をつくり出したのは、神村辰也さんです。

神村さんは、明治44年に高砂町（中央区）で生まれ、13歳ごろから人形町の川島べっ甲店で3年ほど修業し、その後は父親について技術を習得しました。簪や櫛などの髪飾りや、ブローチなどの装身具も手がけました。昭和60年保持者認定。

平成13年区外転出





# 登録文化財

## 【史跡】

高田早苗誕生の地 森下4 24付近

高田早苗は明治〱昭和初期にかけての政治学者・政治家・教育者で、万延元年（1860）、深川伊予橋通りにあつた旗本吉田家の長屋で生まれました。

彼は明治15年（1882）、東京大学在学中、小野梓に大隈重信を紹介され、立憲改進黨の結成に参加。卒業後、大隈の東京専門学校（明治35年、早稲田大学に改称）創立に参画しました。

明治21年、読売新聞に主筆として入社。明治23年、衆議院議員となりました。明治40年、早稲田大学学長となり、大正4年（1915）、第2次大隈内閣の文部大臣に就任しました。

その後、大正12年〱昭和6年（1931）、まで早大総長をつとめ、昭和13年に79歳で没しました。



高田早苗（日本学士院所蔵）

『国史大辞典』（吉川弘文館）より転載。

## 指定解除

### 【無形文化財（工芸技術）】

漆芸 新大橋2 13 9 大岩仲治  
（解除理由）死亡のため。

### 保持者認定解除

### 【無形文化財（工芸技術）】

漆工 石島12 7 下崎勝喜  
（解除理由）死亡のため。

## 登録解除

### 【有形民俗文化財】

阿弥陀供養塔 元禄9年在銘  
如意輪観音供養塔 寛文6年在銘  
六十六部廻国供養塔 宝永8年在銘  
亀戸3 34 2 龍眼寺  
（解除理由）遺失のため。

## 所在地変更

### 【有形文化財（建造物）】

石造燈籠 御作事方・御勘定方  
御材木方奉納一対  
猿江2 2 17  
猿江神社内藤森稻荷神社

### 【有形民俗文化財】

水盤 野村屋五郎兵衛奉納  
猿江2 2 17  
猿江神社内藤森稻荷神社

## 第5回「江東ふるさと歴史研究」

論文専集中！（6月27日〱切）

詳細は文化財係まで。

## 平成14年度 民俗資料寄贈者リスト

文化財係では、区内で使われていた古い生活の道具を、郷土を知るための貴重な資料として収集しています。

それらのほとんどが、区民の皆さんからご寄贈いただいたものです。

平成14年度は次の皆さんからご寄贈いただきました（寄贈順、敬称略）。

ありがとうございます。

### 寄贈者名（住所） 寄贈物件

- 杉浦 允（東砂8） ひな人形
- 塩田 真（北砂3） 五月飾り
- 山谷 明作（白河3） 蚊帳
- 木村すみ子（富岡1） ついたて他
- 田吹 文雄（松戸市） 伊達綱村書状
- 澤田 猛（三好3） 額他
- 丸山ふさ江（上田市） 森家文書
- 松枝 きく（大島2） 和竿
- 野口 敏夫（古石場1） 本
- 中村 千鶴（八尾市） 古写真他
- 田中 浩子（大島9） 奉公袋他
- 新田徳太郎（平野3） 竿はかり
- 斎藤美江子（北砂3） 二重廻し
- 堀江 絹子（亀戸7） 手あぶり火鉢
- 関口 喜永（大島7） 刺子他
- 磯貝 房吉（大島5） 投網
- 高田 晃（佐賀1） 肥料粉碎石
- 浜村 元治（船橋市） 古写真

今年度もご協力をお願いいたします。

## 工匠館三二展示

# 職人の仕事場模型

伝統工芸品を展示している工匠館は森下文化センター（森下3 12 17）の2階にあります。同じ2階の廊下に工芸品の三二展示があることをご存じでしょうか。今回、工匠寺番館の常設展示替え（6頁参照）にあわせて、展示品を替えました。

展示品は、桶職人の仕事場を忠実に10分の1に縮小した模型です。模型化したのは、「桶栄」を屋号とする川又栄一さんの仕事場（扇橋1）で、川又さんは3代続く桶職人です。

木製の桶は、飯びつ・風呂桶など実用サイズのままに使われます。材料はサワラを使います。模型を見てわかるように、仕事場の軒先には材料となる板や、加工した部材が天日にさらされ、桶になる時を待っています。

次回以降の仕事場模型の展示は、5月は漆職人、6月は釣竿職人、7月は更紗職人を予定しています。

